

第5回「泉大津市オリウム随筆賞」

【佳作】

糸屑

家野未知代・京都府

我が家の斜め向かいに、氷室さん夫婦が住んでいる。

夫の道夫さんはタクシーの運転手をしていたが七十歳を機に車を降り、いま八十歳。妻である栄子さんは、自宅で洋裁の仕事をしている。用事で伺った時は、いつでも玄関口に風呂敷包みがある。私が不思議そうに見つめると、

「御直しが仕上がったし、もうすぐ取りに来はるねん」

と言う。イージーオーダーも引き受けているとの事。一着いくらの代金を頂くのに、毎日コツコツと糸との暮らしをしてきたのだろう。口数少なく、人の事をとやかく言わない所が、それを思わせる。子どもが無く、友人との付き合いも少ないようで、この夫婦と道で出会うことがあまり無い。

かなり前のことだが、夫婦寄り添って歩く後姿を見た。道夫さんの腰は「く」の字で、足の膝も曲がったままだ。急いで歩くので、左右に揺れる。栄子さんが横でかかえ、倒れないようにしている。人目につかぬよう急いでいるのだと分かるが、驚きのあまり見つめたまま立ち尽くしてしまった。

それから後は、様子伺いをするようにした。道夫さんの病状は益々進行し、パーキンソン病と診断が下りたようだ。自宅での一人介助を続ける栄子さんを、たまに労う。

「ほんまに、ようやるねえ。ヘルパーさん来てもらったら？」

「どうもあらへん。お風呂に入る時だけ、溺れんように見なあかんけど、後は何とかなら」

その頃も、玄関には風呂敷包みがあった。

一年前の早朝七時、栄子さんが我が家のインターホンを鳴らした。

「ちよつと助けて！ 座らせそこねた」

私は急いだ。栄子さんが助けを求めるなんて、よっぽどのこと。玄関続きの部屋の押入れのねきに、道夫さんがしゃがみ込んでいた。

「ど、どうしたらいい？」

「一緒に抱えて！ 座らせさえしたら——」

痩せてきている道夫さんだが、全く力を入れてくれないので、持ち上がらない。二人で力を合わせ、やつのことで、押入れを利用したベッドに座らせることが出来た。すると道夫さんは足腰を曲げたまま、ゆっくりと寝転んだ。

他の壁の二面を使って机が備え付けられ、流れ作業で仕事が出来るようにしてあった。洋裁をしながら、道夫さんのすぐ傍に居て、小さな声も聞き漏らさないようにして暮らしてきたのだろう。

窓のない四畳半のその部屋は薄暗く、手元を照らす電気スタンドがコーナーごとに取り

付けられている。何十年も前の形をしたアイロンは、周囲の白の中で重々しい黒で映えていた。焦げたりほつれたりしているアイロン台の上を、擦り続ける栄子さんの指先の軌跡が、何重にも重なって私の脳裏に写し出された。

二か月前、氷室さんの家の前で救急車が停まった。飛び出して行った私に、夫が気管に食べ物詰めたと言った。栄子さんは説明し、「覚悟をしてるんや」と落ち着いて話す。

入院手続きが難しそうだと不安だから、同行してほしいと言う。パジャマなどの買い物も含め、その日は一日付き合った。

病院通いをする栄子さんの一人暮らしが始まったが、やはり、玄関に風呂敷包みは置かれていた。

栄子さんと話す機会を増やした方が良いのではないかと考え、ダンスの奥に仕舞い込んであった若い頃の濃いブルーのワンピースのリフォームを頼むことにした。大きく広がるギャザースカートなので、六十代の私にはとても恥ずかしく、もはや着れなくなっている。

「キュロットにしたげよ。解くわ。どんなに小さくても、私は布を切り捨てられへんよ」

三日後、動きやすそうなキュロットを仕上げ持ってきた。そして、支払いはいらぬと言おう。

「世話になって……私は他には何もできへん。出来るのは縫いもんだだけ」

家上がるよう勧め、茶菓で接待した。揉めながらも、支払いを受け取ってもらった。

キュロットを広げてゆっくり眺めていると、糸屑が付いていた。摘んで取る。そして、栄子さんの孤独と向き合った。彼女の言葉が、私に纏わりついて離れない。

「私の両親は、早よ死んでるの。三十歳頃に。居て欲しい頃に親は居ず、身寄りもないねん」

険しい顔で、うつむいた。

「私の遺影などいらん。飾る人が何処に居る？ 清水寺の合祀墓に入れてもらうんや」

内緒話のように、声をひそめた。

「とことんまでここで暮らしたら、ケアハウスに行くわ。その費用はもう用意できた」作り笑顔の裏から、辛い悩みがのぞく。

また一つ、糸屑を見つけた。